

戦後七権の取り組みを評価する国判するがほとんどです。それを一他面部の立場から「反知性主義」と批判するのはフェアじゃありません。ただ一方で、先程も社会ない。ただ一方で、先程もていくいいましたが、ポストモダ

その流れで主権が揺らいでいる時に、中央が地方への「さぐり」を強めているかのよう

に保障する介入を強めているよう一連のに映る。そこに、安倍さん

の議論自身のイメージ、というか一部を取り巻きのタカ派の言動も重なって、嫌悪感や争いが警戒感を持つ人がいるのもわかります。もう少しハト

まあれ派のイメージが強い政権だら見たら、同じことをしても、的に見世間の受け止め方は随分ととも思違うのではないでしょう

リズムの困難

「義」批 後者は、我々が生き残るます。として「我々とほどの範囲で、主」に「関わります。主権国家の構成メンバー全体が我々を切り々だという意識は、自「責

そこにリベラリズムの困難がある。リベラリズムは、我々主権国家の国民の、生き残りを図る思考です。ルールズが「正義論」で

「無知のベール」として述べた「あなたが私と同じ立場でも同じことが言えるか」という入替可能性の議論において、入替可能性が想定されるのは国民国家の枠内です。国民国家内での位置にああなたが落ちてても耐えられるのかと問い掛ける訳です。

国民や主権の自明性が動揺するポストモダンにおいては、「なぜ国民国家の枠内で入替可能性を議論するのか」と巻き返されて、終了します。国民や主権の自明性が揺らげば、我々が不分明になって再配分が正当化できなくなり、市場原理主義に近づくと他ありません。ここでも、政策的選択肢としてというより、市場でないものが自明でなくなる結果、必然的に市場が残る訳です。

だから僕はかねて「顔が見える近接的範囲を我々と「さ」というヒトが数十万年営んできたソーシャルスタイルを再構築すべきだと

言ってきました。そうしたスモールユニットを前提としないと、共同性の回復に向けたパターンリスティッ

クな「感情プログラム」のイ

「ストール」は直ちに全体主義に帰結します。しかし「感情プログラム」のインストール」はもはや不可欠な

の。 苅部 三輪太郎さんの小説「憂国者たち」(講談社)は、日本文学科の二人の大学生が卒業論文で三島由紀夫にとりくみ、それぞれに海外情勢や国内の政治運動にかかわってゆくという物

語です。これを読んだときに、ふと連想して丸谷才一さんの『震声で歌へ君が代』を読み直しました。これは一九八二年の刊行で、はたして現在の日本ではナ

シヨナリズムが現実感をもって生きているかどうかをテーマにしていますが、三十年以上がすぎたいま説むと、まだこの当時は日本

に絡めて話したいんですが、森本さんは、リチャード・ホフスタッターの『アメリカの反知性主義』を神学的に読み直しながら、アメリカにおいては、それは知性そのものの否定ではないと念押ししています。特定の集団が知識や知性を独り占めすることを許さないと。独占や覇権に意識を申し立てる。カウンター・ディスコースがアメリカの歴史の通奏低音としてある。そのことを「反知性主義」といつているのであって、平たくいえば、反権威主義の伝統のごとく、むしろ肯定的な側面を強調して

います。たとえば白人男性

かけがあれば、まったく別な方向の政治運動に向かっ

てしまうような、浮わつた感じがある。この薄っぺらさは、ちょっと現実のヘイトスピーチ

や、それに対するカウンター行動にも見られる気がします。ナシヨナリズムの美感がなくなっている一方で、そうした表面的な感情につき動かされた行動が突発するということ事態を言葉で解明し、自由な政治秩序を守る課題につなげるにはどうしたらいいのか。そんなことを考えさせられました。

渡辺 森本あんりさんの『反知性主義』(新潮社)に絡めて話したいんですが、森本さんは、リチャード・ホフスタッターの『アメリカの反知性主義』を神学的に読み直しながら、アメリカにおいては、それは知性そのものの否定ではないと念押ししています。特定の集団が知識や知性を独り占めすることを許さないと。独占や覇権に意識を申し立てる。カウンター・ディスコースがアメリカの歴史の通奏低音としてある。そのことを「反知性主義」といつているのであって、平たくいえば、反権威主義の伝統のごとく、むしろ肯定的な側面を強調して

います。たとえば白人男性が作り上げた制度や慣行に対して、マイノリティの人々が対抗していく。そうしたあり方を「反知性主義」という言葉で説明している。既存のシステムに対して、宗教、ビジネス、政治といった分野において次々と対抗言説を作り、変化を生み出してゆく。こうしたダイナミズムがアメリカにはあったことを、森本さんは例証している。同じような動きが今の日本にはあるのか。社会全体の大きな構造とまではいわないまでも、六〇年代には白人と同じ座席に着くことのできなかつた黒人が半世紀後には大統領になるぐらいのカウンター・ディスコースが日本にはあるのか。せいぜい安倍政権に不平不満の言葉を吐くことぐらいしかできないんじゃないか。そのあたりの不甲斐なさや物足りなさに人々は無力感を抱いている感じがしますね。権力の側もその点はよくわきまえていて、「どうせ今は反対していますが、しばらく時間が経てばケロっと忘れろ」と安心しきっています。事実、秘密保護法案への反対もほとんど風化していますよね。その意味では、日本に「反知性主義」はなく、実に「知性主義」的な社会なかもしれません(笑)。



『反知性主義』 森本あんり